

## 「テトス書」

2019年05月06日

テトスへの手紙 1章1節～4節 神の僕、イエス・キリストの使徒パウロから——わたしが使徒とされたのは、神に選ばれた人々の信仰を助け、彼らを信心に一致する真理の認識に導くためです。これは永遠の命の希望に基づくもので、偽ることのない神は、永遠の昔にこの命を約束してくださいました。神は、定められた時に、宣教を通して御言葉を明らかにされました。わたしたちの救い主である神の命令によって、わたしはその宣教をゆだねられたのです。——信仰を共にするまことの子テトスへ。父である神とわたしたちの救い主キリスト・イエスからの恵みと平和とがあるように。

テトス書は、「神の僕、イエス・キリストの使徒パウロ」が「信仰を共にするまことの子テトス」に書いた手紙という形になっている。差出人のパウロについては、「わたしが使徒とされたのは、神に選ばれた人々の信仰を助け、彼らを信心に一致する真理の認識に導くためです。これは永遠の命の希望に基づくもので、偽ることのない神は、永遠の昔にこの命を約束してくださいました。神は、定められた時に、宣教を通して御言葉を明らかにされました。わたしたちの救い主である神の命令によって、わたしはその宣教をゆだねられたのです」と記している。パウロはキリストの使徒であり、神が永遠の昔に約束された命の御言葉を、宣教を通して明らかにしようと、神の命令によって、その宣教を委ねられた者であると述べている。テトス書は、使徒であるパウロが書いたとしているが、パウロの手紙のような強力な神学的主張は薄く、語彙や歴史的背景も異なり、常識的な倫理、道徳が説かれ、時代に受け入れられ、キリスト教が市民権を得たいという書き方をしている。パウロが書いた手紙ではなく、パウロの名を借りて、信仰を諭す目的で書かれた手紙である。2世紀になって、書かれた手紙と見なされている。受取人のテトスも、亡くなっていただろうが、彼の名が用いられている。

テトスについて、パウロは「兄弟テトス（Ⅱコリント2:13）」「わたしの同士（Ⅱコリント8:23）」と書いている。紀元48年に、エルサレムで最初の教会会議「使徒会議」（「エルサレム会議」とも言われている）が開かれた。パウロは、律法を守るのではなく、信仰によって神に義とされる、一方的な恵みの福音を宣教した。ユダヤ教からキリスト教に回心した人々の中に、ユダヤ教を色濃く残している者たちがいた。彼らは、パウロが建てた諸教会を訪れ、信仰によって救われると理解しても、やはり、律法を守り割礼を受けなければ、完全な救いに与ることができないとユダヤ主義を吹聴した。パウロは、それではキリストの十字架が虚しくなると、エルサレム教会に赴き、信仰理解の一致を求めた。会議において、ペトロは、先祖も負いきれなかった軛（律法）を弟子たちの首に懸けて、神を試みてはならないと言い、主イエスの弟ヤコブは、神に立ち帰る異邦人を（律法で）悩ませてはならないと言い、パウロの主張する福音理解との一致を得た。律法から自由にされたことで、ユダヤ教の枠から外れ、キリスト教として、世界の宗教へと向かう契機になった。この使徒会議に、パウロはバルナバと共にテトスも同行させた。ガラテヤ書2章3節で、「しかし、わたしと同行したテトスさえ、ギリシア人であったのに、割礼を受けることを強制されませんでした」と書いている。パウロはテトスを深く信頼していたことが分かる。いつものように、「父である神とわたしたちの救い主キリスト・イエスからの恵みと平和とがあるように」という祝福が祈られている。